



# 「炭鉱（やま）への想い

## ～菊地正男絵画展～」

主催：いわき市暮らしの伝承郷

共催：常磐炭田史研究会

協力：いわき市石炭・化石館

期間：平成23年2月12日（土）  
～3月27日（日）

場所：いわき市暮らしの伝承郷 企画展示室  
住所：970-8043

福島県いわき市中央台・県立いわき公園内  
電話：0246-29-2230



## ご あ い さ つ

平成２２年度第３回企画展「炭鉱（やま）への想い」－菊地正男絵画展－の開催にあたり、いわき市をふくむ常磐炭田は、九州や北海道の大炭田に対して、京浜工業地帯に近いという地の利を活し、最盛期には大小１３０もの炭鉱を起し、我が国の産業量の約１割を占めるまで成長いたしました。

しかし、この時代を担った基幹産業も、寄せる国際石油資本により、石炭から石油へというエネルギー革命の本格化により、昭和３０年以降、急激に衰退の道を辿ったことは周知の事実であります。

その時代に菊地正男画伯は、常磐炭田、そこで働きながら油絵に取り組みました。それも脚光著しい石炭産業の華を描くのではなく、炭鉱の労働はじめ、なりわいとする労働者の素顔などもリアルに描き続けました。

最早、そのなりわいもいわきを探しても眼にすることはありませんが、菊地画伯の描かれた絵画は、現今、歴史絵として、その持つ意味が高まることは必定であり、かつ、いわきの歴史を裏付ける絵画と成り得ましょう。

その意味からも、多くのいわき市民の鑑賞を願うと共に、いわきの歴史の１頁として、当施設としましても、末永く伝承して参りたいと考える次第であります。

開催にあたりまして、菊地画伯はもちろん、常磐炭田史研究会の皆さんには多大なご協力・ご尽力を賜り、衷心より感謝を申し上げ、開催のあいさつにかえさせていただきます。

平成２３年２月

いわき市暮らしの伝承郷  
館長 小野佳秀

## ご あ い さ つ

常磐炭田史研究会は平成21年4月に、いわき市石炭・化石館で「常磐炭田産業遺産のストーリー展」を開催し、かつて当市・好間地区にあった古河好間炭砵でお仕事をなされ、後に東京で画家として活躍なされて現在に至る二紀会の菊地正男先生の三作品を展示しました。

これは更にその前の平成15年6月に当市・平で開催された（財）東部石炭懇話会主催の「炭鉱（ヤマ）への想い～菊地正男展」での先生の作品群が多く、の市民から強い関心と共感を得たことを出発点として開催したものです。

今回のいわき市暮らしの伝承郷での当企画展「炭鉱（やま）への想い～菊地正男絵画展」は、それらの先行展覧会を踏まえた菊地先生の炭鉱労働の実体験をモチーフとした当市初展示の作品を展覧するものです。炭鉱の労働・生活・環境等を愛着と敬意をもって優しい眼差しで描きこまれた作品の数々は、ご来館の皆様は何らかの記憶を誘い出しながら歴史的なストーリーを語りかけ、いわきの近代化の歩みを語る証言としても豊かな作品世界をお見せすることができるのではないかと信じております。

なお、この企画展を当研究会と共催の形で開催していただいた暮らしの伝承郷の皆さんに深く感謝申し上げます。また、この企画展に熱い想いを抱いてご協力をいただきました東部石炭懇話会の鞍田東様、当方の勝手なお願いに快く応じてご配慮をいただいた作家・菊地正男先生のご指導・ご協力に深く感謝申し上げます。

更に願わくば、私たちとしましてはこれらの貴重な作品群を一括して保存・鑑賞できるような場や日々が来ることを夢見てご挨拶といたします。

平成23年2月

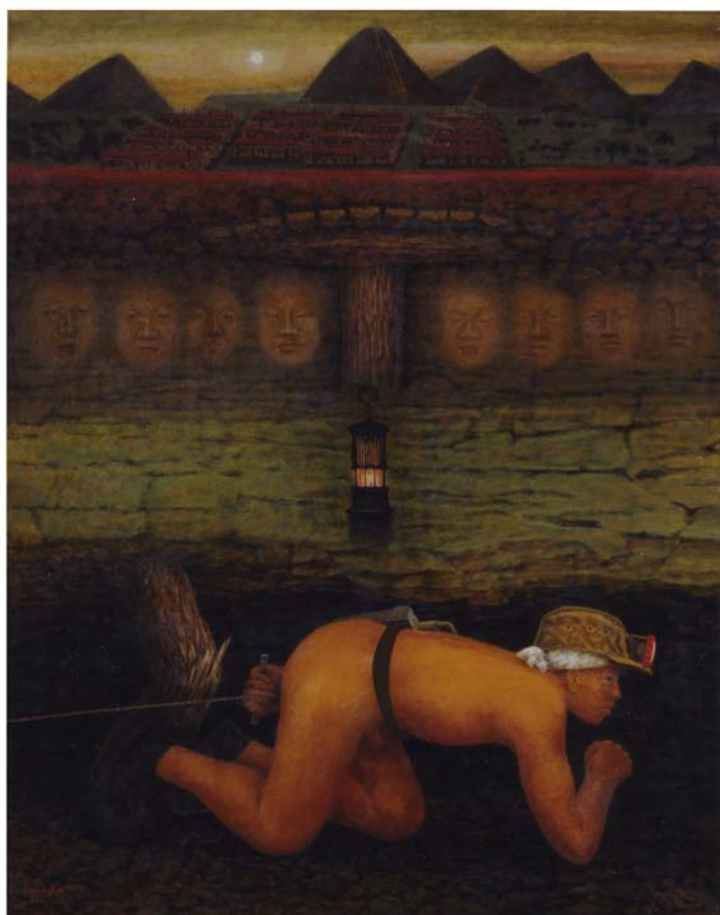
常 磐 炭 田 史 研 究 会  
会長 大 谷 明

## ～炭鉱（やま）への想い～ 菊地正男絵画展 出品一覧表

| 掲載ページ | 題                    | 制作年    | 号数       | サイズ<br>(横×縦) | 註                                                      |
|-------|----------------------|--------|----------|--------------|--------------------------------------------------------|
| 1     | 働く人(撒収)              | 1995 年 | F100 号   | 130.3×162.1  | 第 49 回二紀展出品<br>炭鉱への想い(平サロン出品)<br>やまへのまなざし展(いわき市立美術館出品) |
| 2     | 桜花の頃                 | 2003 年 | F100 号   | 130.3×162.1  | 第 57 回二紀展出品                                            |
| 3     | 働く人(乗り回し)            | 2004 年 | F100 号   | 130.3×162.1  | 第 58 回二紀展出品                                            |
| 4     | 働く人(切羽)              | 2005 年 | 変形 150 号 | 260.6×162.1  | 第 59 回二紀展出品<br>成井賞受賞                                   |
| 5     | 働く人(古河好間炭<br>鉱火力発電所) | 2005 年 | F10 号    | 53.0×45.5    | 東京二紀展出品                                                |
| 6     | 尺八を吹く                | 2006 年 | F20 号    | 60.6×72.7    | 春季二紀展出品                                                |
| 7     | 働く人(ねずみ)             | 2006 年 | 変形 150 号 | 260.6×162.1  | 第 60 回記念二紀展出品                                          |
| 8     | 働く人 (議定場)            | 2006 年 | F30 号    | 90.9×72.7    | 第 59 回受賞者展出品<br>2006 年於:銀座松坂屋別館                        |
| 9     | 堅坑坑底                 | 2007 年 | F10 号    | 45.5×53.0    | 東京二紀展出品                                                |
| 10    | 働く人<br>(バッタ、かけ)      | 2007 年 | 変形 150 号 | 260.6×162.1  | 第 61 回二紀展出品                                            |
| 11    | 働く人 (昇坑)             | 2008 年 | F50 号    | 90.9×116.7   | 春季二紀展出品                                                |
| 12    | 働く人<br>(小風戸板張り)      | 2008 年 | 変形 150 号 | 260.6×162.1  | 第 62 回二紀展出品                                            |
| 13    | 給炭日                  | 2009 年 | F100 号   | 162.1×130.3  | 第 24 回東京二紀展出品                                          |
| 14    | 働く人 (軌道夫)            | 2009 年 | 変形 150 号 | 260.6×162.1  | 第 63 回二紀展出品                                            |
| 15    | 働く人 (あがり)            | 2010 年 | F50 号    | 90.9×116.7   | 第 10 回記念春季二紀展出品                                        |
| 16    | 働く人<br>(拾い炭・休憩)      | 2010 年 | 変形 150 号 | 260.6×162.1  | 第 64 回二紀展出品                                            |

## 菊地正男(二紀会会員)―略歴―

- 1930年 東京滝野川で誕生
- 1944年 国民学校高等科卒業  
日本マグネシウム株式会社 入社
- 1945年 8月 終戦のため退社
- 1945年12月 福島県古河好間鉱業所 入社
- 1959年 9月 同、閉山のため退社。上京する。
  
- 古河好間炭砒で絵を描き始める
- 1952年（昭和27年） 中央美術学園 通信教育部卒業  
二紀会展出品後、二紀研究会で学ぶ
  
- 福島県展入選・東北現代美術展入選・中央美術協会展入選・二紀展入選
  
- 中央美術協会展で協会賞、優秀賞 受賞
- 二紀会展で奨励賞、同人賞、会員賞、成井賞 受賞
  
- 現在、二紀会会員・日本美術連盟会員



1995 年 第 49 回二紀展 働く人(撤収) F100 号(130.3×162.1)

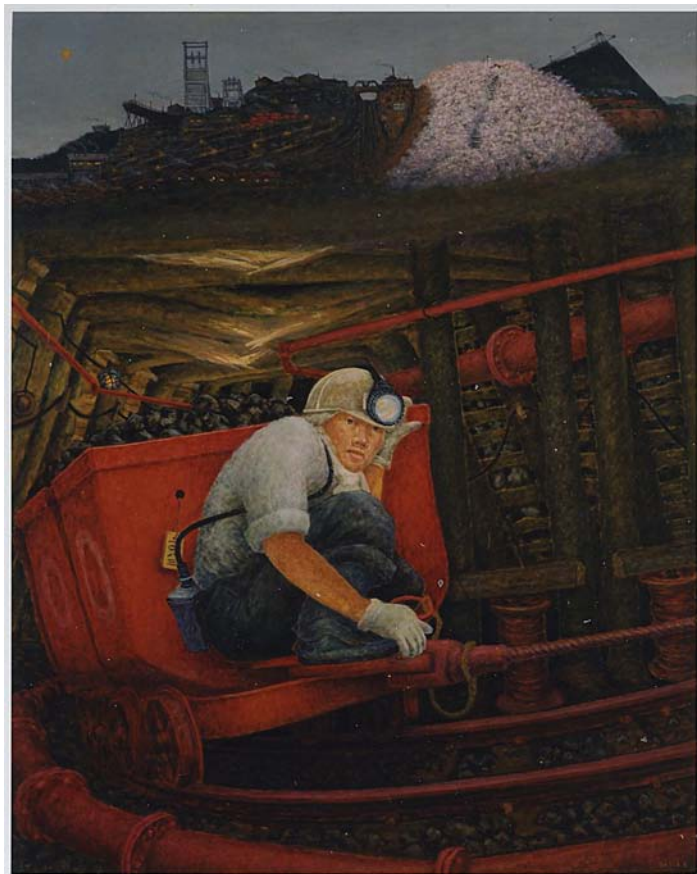
地球の引力によって坑道は、天井が押され、地盤が盛り上がり狭くなってきます。石炭を掘られている坑道は手入れをされながら保持するが、掘られた後の坑道は器物を撤収する作業が残る。人間が腰をかがめ歩ける位の中から、針金 1 本に器物を縛り引っ張り出す作業も時にはありました。



2003 年 第 57 回二紀展 桜花の頃 F100 号(130.3×162.1)

先の炭鉱への想い展の頃、熊野神社の桜花の話を聞いて、明るい美しい暖かい色の桜花を描いてみようと思い描きました。この3人の立つ所は丁度、汽かん車が石炭を積んだ貨車をつないで内郷へ向かう線路の上になります。ここからは、ズリ捨場は見えませんが、右上に入れてみました。





2004年 第58回二紀展 働く人(乗り回し) F100号(130.3×162.1)

炭砒（やま）には、数多くの職種があり、そのうちのひとつ、乗り回しを描いてみた。坑内の採炭場で、石炭の積みこまれたトロッコ（実車）と空車の交換に従事する運搬夫である。

普通、坑道では（坑外も同じ）このように捲きあげる炭車の先端には、脱線の危険があるので、乗り回しは乗らないが、狭い場所での捲きあげの始めは静かに捲くので、先端に乗り、広い場所にかかると飛びおり、後方のトロッコの間の連結間に飛び乗る。そのあとは捲きあげも一定の速度に固定され、電車坑のある水平坑道の捲き立てで終わる。

この作品を描く頃、平サロン個展の続きで描写はダブルイメージだった。画面上部の坑外の穏やかな風景と、同じ時刻の坑内の危険な作業を重ね描いてみた。





2005 年 第 59 回二紀展 働く人(きりは) 変形 150 号(260.6×162.1)  
(成井賞受賞作品)

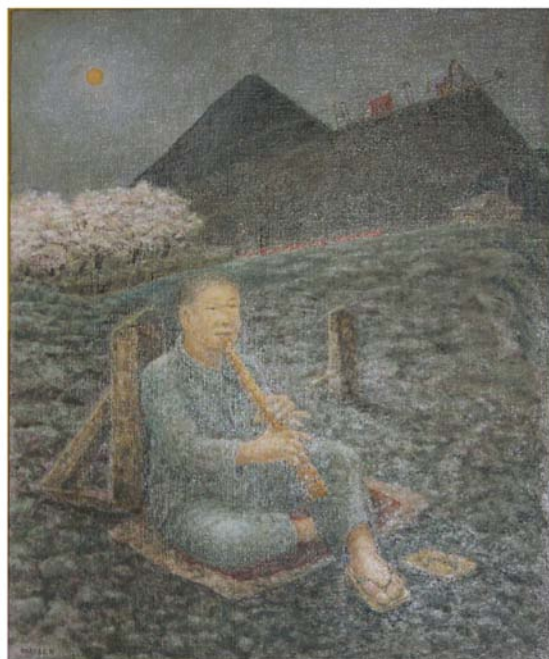
坑道の最先端の採炭現場で「きりは」と言います。地熱の暑さはどこの切羽も同じでした。坑道は狭いので絵にするには、どう構図を造るか悩みます。

この絵を見る人が炭壁になって、働いている人間を見ているような思いで作画してみました。天井（天盤）から吊り下げられている風管の中は扇風機から送られてくる風が涼しくて、その中に弁当を入れて暑さに悪くならないようにしていた人も居ました。風管の中には物を入れてはいけない事になっていましたが、おおめに見ていたようです。



2005 年 東京二紀展 働く人(古河好間炭砒火力発電所) F10 号(53.0×45.5)

好間川の岸边にありました。絵の左が川上で右が川下になります。ここで使用後の石炭の燃えがらは、この絵を見る人の右後方にあり、赤茶色の多い色をした大きな山を作っていました。ここをあく場といいました。発電所と好間川を渡りあく場を結ぶ小さな鉄橋もありました。作業員を入れて描いてみました。



2006 年 春季二紀展 尺八を吹く F20 号(60.6×72.7)

昭和20年（1945年）から数年は海外からの引きあげた人も炭砦に就職してきました。いろいろな人の集まりでした。知識人も多く居ました。この人達に人生の道のようなものも教えてもらったようです。15才で炭砦に入って、他の世界に出た事のない私ですが、絵を描く事もこの炭砦の中からです。尺八を吹くこの人と息子は樺太（今のサハリン）から引きあげた方です。息子さんは、選炭場の水洗ズリの水のしたたるトロッコを押していました。樺太では学校の校長先生を担当されていたそうです。夕刻、宵の暗くなる頃、古いズリ捨場で尺八を吹いていた事を聞いて、その姿を描いてみました。



2006 年 第 60 回記念二紀展 働く人(ねずみ) 変形 150 号(260.6×162.1)

どこにでもある事ではありませんが、坑道の休み場にねずみの現れる所がありました。

坑夫の食事時間にそのにおいをかいで坑木の陰から出てきます。時には弁当の包を破られたりした人も居ました。坑夫は飯粒やおかずを箸で投げあたえたりして、ねずみの可愛い動作を笑顔で見っていました。長い日数は生きていないようで、いつの間にか居なくなります。このねずみは坑外から坑木の間に乗って運ばれてきたのです。私は坑底で雀、蝶、トンボなどを見たことがあります。入気坑の風圧で吸い込まれたのだと思います。坑道でコオロギの鳴く声も聞いた事があります。

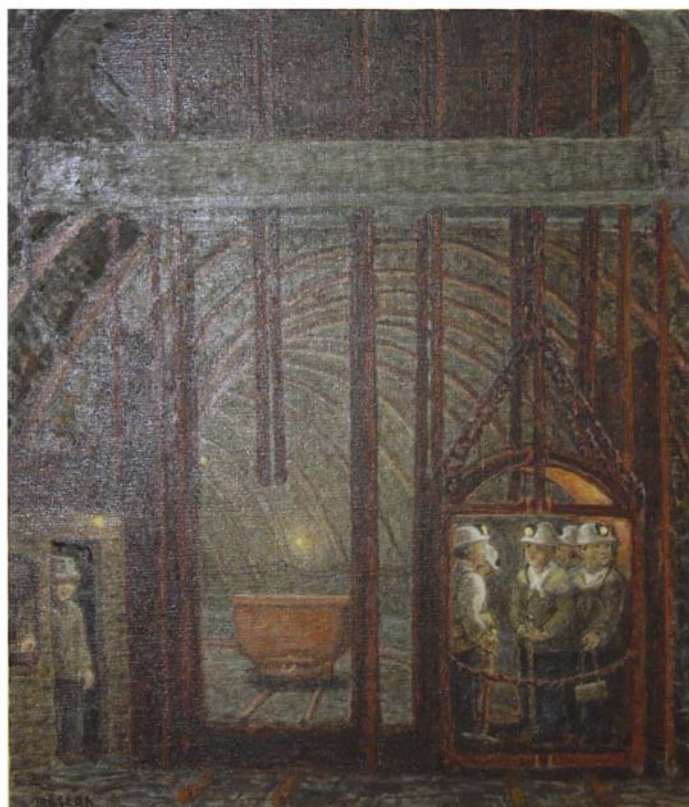




2006 年 第 59 回受賞者展 働く人（議定場） F30 号(90.9×72.7)  
於:銀座

坑内夫、主に採炭夫（切羽で石炭を掘る）の1日の労働、仕事割り当て等配置をする事務所、斜坑の坑内にありました。

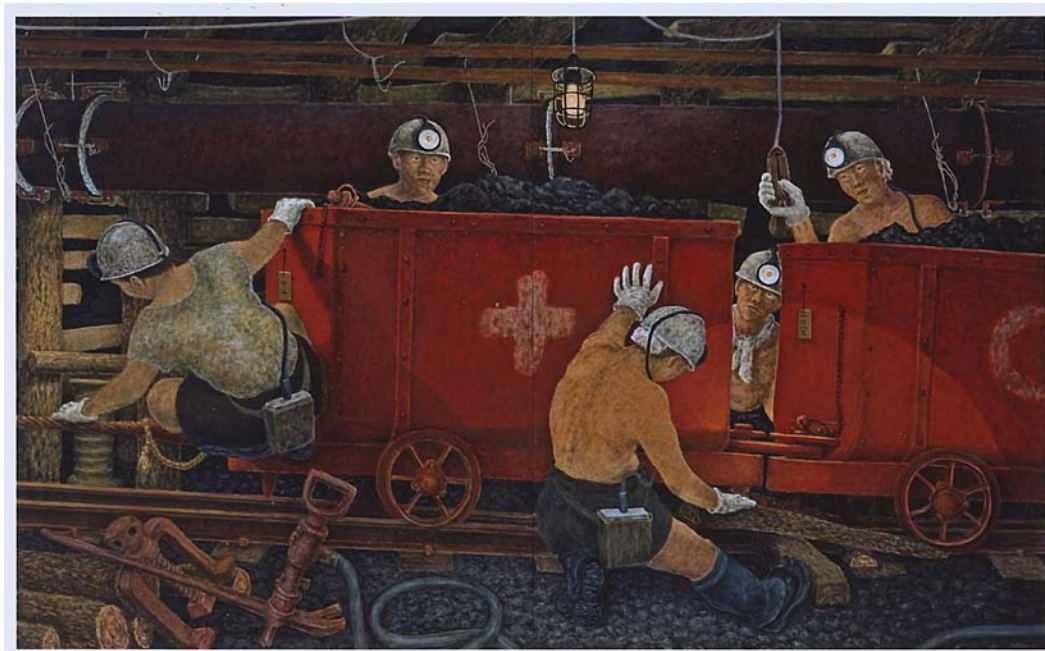
交代時間で坑夫が使用した器具を返す姿を描きました。



2007 年 東京二紀展 竪坑坑底 F10 号(45.5×53.0)

当時、古河好間炭砦には竪坑がふたつ、斜坑がふたつありました。それぞれ人道坑と運搬坑になっていました。人道坑の竪坑坑底を描きました。構図の関係でこの絵の左の信号を送る人と小屋は、この絵を見る右場所にありました。

竪坑入口の明るい賑やかな地上とは正反対のこんな坑底なのです。



2007年 第61回二紀展 働く人(バッタ、かけ) 変形150号(260.6×162.1)

炭車（トロッコ）が脱線した事をバッタと言います。狭い坑道で空車ではなく、石炭を積んだトロッコがバッタをした時、どのようにして線路に車輪をのせるか、それを描いてみました。

脱線した車輪の下に抗木（バタ木）を入れて捲きあげ機（捲場）の力を利用して静かに捲きあげます。車輪が線路の高さより少し高くなったら、炭車を横より押すと元の正常の位置に（レール上）車輪が乗ります。画面右の人物が信号しています。

画面左の炭車に乗っている人物は、現場がカーブのため、ロープのある先頭の炭車が引きつけられないよう、荷をかけた状態で乗っています。（いつでも飛び下りるようにしています。）

信号は炭砒内どこも同じに決まっていました。

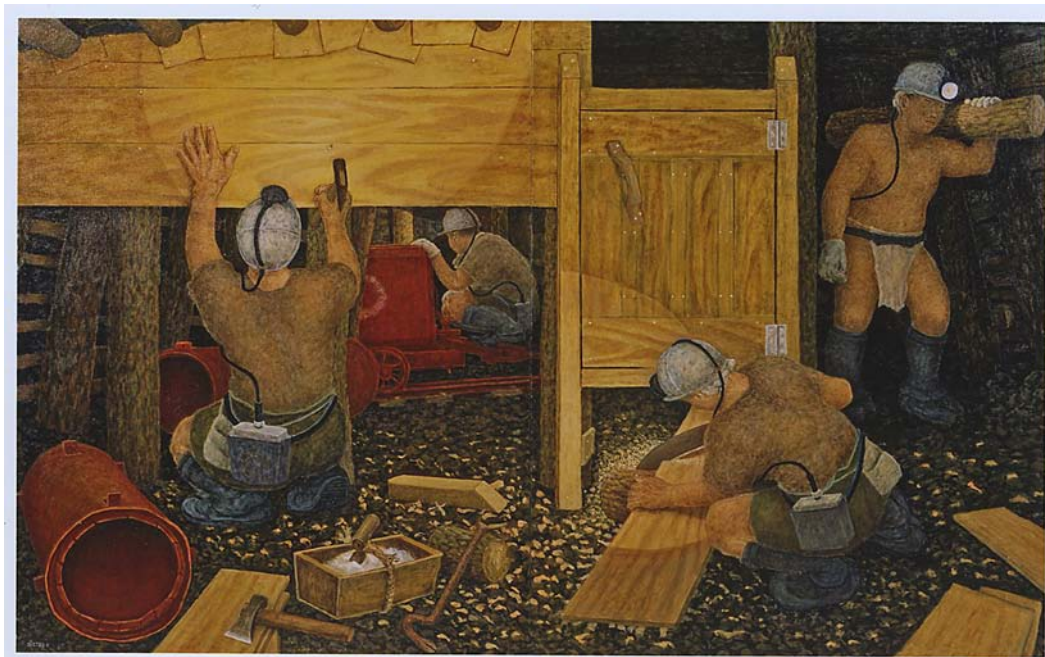
1つは止め、2つは捲け、3つは下げ、4つは静かに下げ、5つは静かに捲け  
7つは非常時となっていました。※6つの信号はありませんでした。





2008 年 春季二紀展 働く人（昇坑） F50 号(90.9×116.7)

切羽の労働作業を終えて疲れた体で、登りの坑道を着替えのある休憩所へ歩む人を描いてみました。



2008年 第62回二紀展 働く人（小風戸板張り） 変形150号（260.6×162.1）

炭砦の坑道には入気坑と排気坑とあり、採炭（切羽）場の近くの坑道には、その2本の坑道をつなぐ坑道（目抜きといいます）が何本かあります。

最先端の目抜きは貫通したままで、あとの目抜きは板張り（小風戸）で塞がれます。通気を坑道先端の採炭現場へ流れるようにするためです。

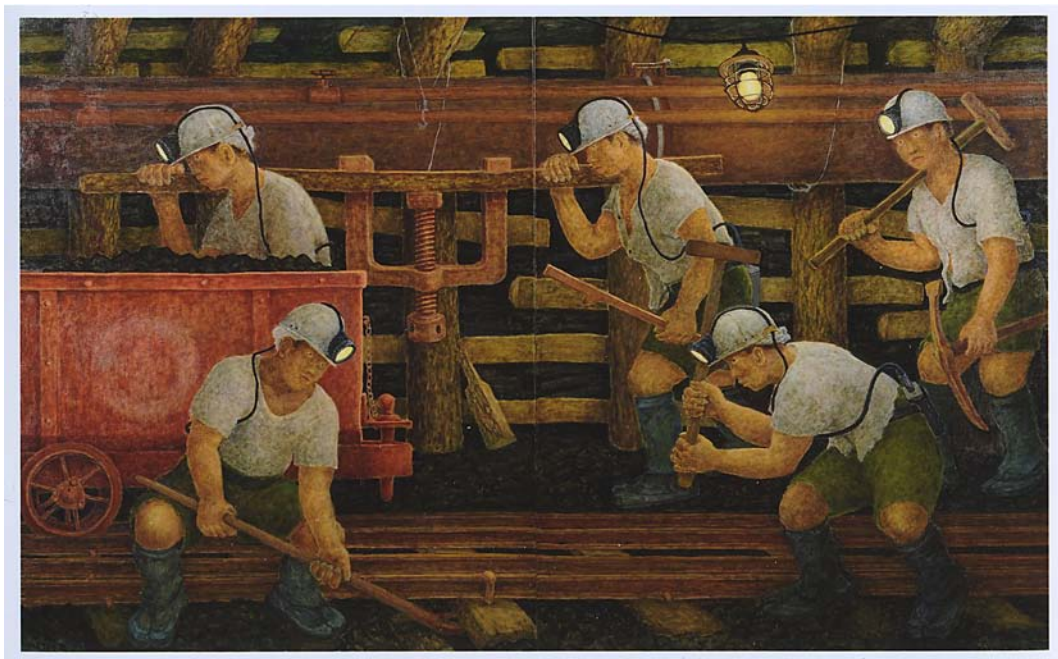
先端の目抜きが貫通したために手前の目抜きを塞ぐことになり、その板張り作業を描きました。

※人の通る坑道は小風戸（こばったり）、線路のあるトロツコの通る坑道は大風戸（おおばったり）と言います。



2009 年 第 24 回東京二紀展 給炭日 F100 号(162.1×130.3)

炭砒長屋の生活では、燃料は石炭です。1ヶ月に何回かの給炭の日があり、会社から無料で石炭を貰います。当日は、主婦達がタンガラ（石炭を入れるカゴで炭砒独特のものです。）を背に決められた、給炭場へ集まります。重い石炭を背負い自宅へ運んで玄関の上り場の床下に納め使用していました。



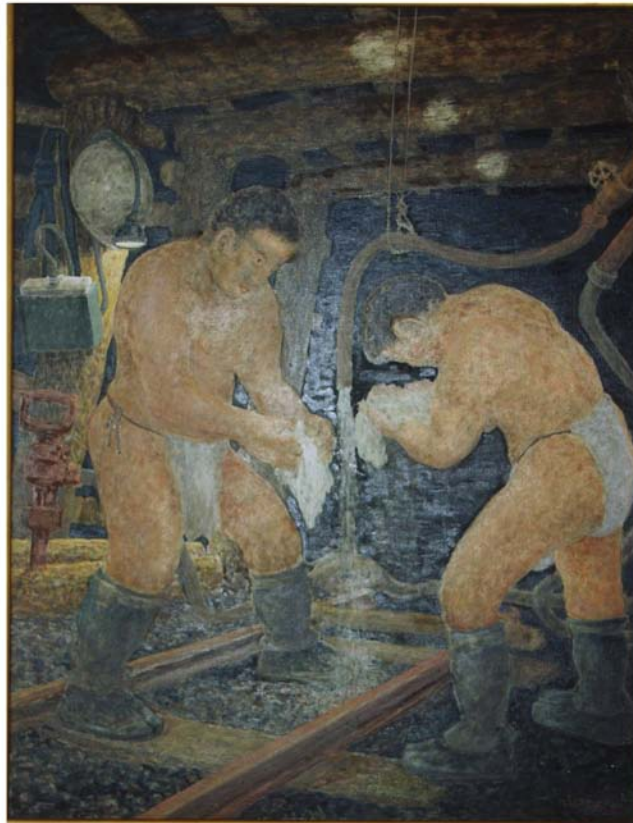
2009年 第63回二紀展 働く人（軌道夫） 変形150号（260.6×162.1）

坑内軌道夫は普通2名で、坑道の保線を見て回っていたと思います。ひとつの卸（おろし）にも何ヵ所かの切羽がありました。

時には坑道の模様替えや、線路張り替えなど大きい仕事の時は人数も多く、公休日に出勤し作業を終えていました。その作業を描いてみました。

奥の2人がかっついていっているのはジंकルといって、線路にカーブをつけるための道具です。大、小2種類ありました。





2010 年 第 10 回記念春季二紀展 働く人（あがり） F50 号(90.9×116.7)

狭い熱い1日の仕事を終わると、水道水で体を洗い休憩所で着替えをして帰途につきます。無事に作業を終え、ほっとする時間です。作業を終え帰途につく事を「あがり」と言っていました。





2010年 第64回二紀展 働く人（拾い炭・休憩） 変形150号(260.6×162.1)

ズリ捨場には拾い炭をする主婦や学生のような若い男の人も居ました。坑内から出たズリや、選炭場から運ばれたボタの中に石炭が入ったりしています。

タンガラを背負い、その石炭を拾い集めて、午後の決められた時間に用意してある坑車に運び入れます。金券と交換します。金券は、会社のものでタンガラひとつで券何枚か決められていたようです。

1日の生活の糧に働く人を描きました。

## (参考資料) 常磐炭田と産業遺産の特色

■石炭産業では基盤産業での石炭の大量消費に応じた大量輸送のための鉄道、港の建設、地下を採掘するという特殊な採掘技術や坑道、坑口、選炭等の商品化技術と施設設備、危険への保安設備や医療対策、大量の坑夫（労働者）と衣食住の確保等が目論まれて大小様々な施設が敷設・開発・建設され、特に発電・排水等の大型施設や複雑な関連施設、生活住宅・生活関連施設が建設されました。炭鉱会社は中央財閥を中心とした会社から地元の零細・中小炭鉱まで多様な規模・組織・体制で立地され、その違いは施設設備や労働環境の大きな違いを生み出し、多くの深刻な問題を露呈するようにもなりました。

それらの施設設備や炭住（炭鉱住宅）等、一山一家とも言われたズリ山を核にした炭鉱社会全体が石炭産業の大舞台＝産業遺産と言えるほどでしたが、それらの石炭産業関連構築物はエネルギー産業の大転換の中で閉山し、重厚長大な施設は取り壊され、廃棄、放置されていって産業遺産として取り残されました。

そしてそれらの一部は我が国、地域の産業基盤の形成に貢献した構造物・技術等の貴重な遺産として黙して語らぬ語り部として徐々に朽ち果てていきながら、全国及び常磐炭田地域に静かに佇んでいます。

■常磐地方の石炭産業は明治時代以降の日本の産業近代化の中心的な基盤として、大規模な施設・設備、関連施設、人的組織をもつ、立地地域に根を張った産業として教育・文化等社会全体の構造をもつ存在でした。

いわきの石炭産業は、1856（安政三）年に片寄平蔵が石炭層を発見し、その利用に着手したのが始まりとされていますが、その開田着手以降、紆余曲折の後、入山採炭（株）や磐城炭鉱（株）が中心となって大規模な採炭が進められ、1944（昭和19）年に常磐炭礦（株）として国策の転変、経済・エネルギー産業の情勢の波にもまれながらも、常磐炭田全体で最盛期には130を超える炭鉱を有する本州最大の産炭地となり、京浜工業地帯へのエネルギー供給地としてわが国の経済的発展を支えてきました。その後、石炭産業と各炭鉱・労働者等は苦難の道を歩み、常磐炭礦（株）は1966（昭和41）年、常磐ハワイアンセンター等を設立し多角経営に乗り出したものの、いわきでは1971（同46）年、常磐炭田の採炭が終了し閉山となりました。

■その常磐炭田の石炭産業は閉山後、内郷、湯本、好間地区等の坑口、選炭場、ズリ山、専用鉄道、発電所、山神社、学校、炭鉱住宅等（常磐炭田史研究会の現地調査では、いわき市から北茨城市の炭田地帯で164件の石炭産業遺産・遺構等）を残しています。また石炭産業の環境は多くの優れた人材のもと、多くの芸術・文化活動でも質の高い成果を展開し、それらは閉山後も特に芸術・絵画作品の優れた業績を上げた方々が出るなど、当市の芸術・文化の水準の向上に貢献してきています。

また、このわずか100有余年の産業史の舞台は同時に広域合併都市・いわき市の歴史と重なる舞台であり、地域に根ざした企業展開は他の炭鉱町・炭都と違って、閉山後、採炭で排出する膨大な温泉に着目した観光レジャー産業への転進の中で躍進を遂げ、地域の活性化に貢献する存在となりました。

【出版・編集及び連絡・照会先】

常磐炭田史研究会（会長 大谷 明）

〒972-8321 福島県いわき市常磐湯本町向田 3-1

いわき市石炭・化石館(ほるる)内 常磐炭田史研究会事務局

TEL : 0246-42-3155

FAX : 0246-42-3157

URL : <http://tankouisan.jp/>

MAIL : [info@tankouisan.jp](mailto:info@tankouisan.jp)